

新しい自分づくり — 教育を内側から支えるもの

中根 広秋



『西南学院百年史』もいよいよ各論執筆の段階に入り、私たち中高部会でも、現在執筆協力を加えて資料の整理や確認を行っている。

今回の執筆では、1986年に発刊された『西南学院七十年史』以降の足跡、特に1990年代の高校の男女共学化とそれを契機に開始された中高の一貫教育体制づくりの過程を多角的に検証し、記述していくことが大きな課題となっているが、そこで忘れてならないのは、共学から一貫へという私たちの改革を内側から支えてきた日々の教育実践への言及である。

本校のカウンセリング体制と教師たちの取り組みもその一つである。

高校がスクールカウンセラーを配置し、教育相談及び支援に取り組むようになったのは1982年度からのことである。公立学校におけるスクールカウンセラー制度の導入¹よりも10年以上早く、それゆえキリスト教学校である本校ならではのカウンセリングの形がつけられた。それは、キリスト教教育の一環として、教師との協同関係の中で、自己形成の途上にあって悩み苦しむ生徒たちを支援するというものであり、そのような位置づけゆえ、当時の校務分掌では宗教部にカウンセリングの係（後に委員会）が置かれ、担当の教員が割り当てられていた。この分掌は2001年度まで続き、2002年度より総務部管轄の委員会の一つになって今に至っている。

高校の年刊誌『遙けきかな』の各部・委員会報告に「カウンセリング委員会」の活動報告が掲載されるようになるのは、2002年3月発行の第8号からである。カウンセラー、養護教諭及び若干の中高の教員による委員会の活動が整えられるようになるのもその頃からのことであった。

1 公立学校のスクールカウンセラー制度は1995年度より導入された。

自立を阻む大きな壁に直面して自問する生徒たち。そのような彼らを援助し、育むことは今日の学校教育の最も重要な課題です。(中略) 個別カウンセリングの対象となる生徒は一握りの生徒に過ぎず、また、それぞれに固有性を持っています。しかし、それらの生徒を通して明らかになってくる課題、すなわち発達段階における自己同一性の危機の問題は、個々の生徒の問題を越えてすべての生徒にあてはまる問題なのです。(中略) 生徒達が直面している課題について知り、学び、学校生活のさまざまな場面で一人一人に語りかけ、向かい合い、自己理解への問い—自分は何者か、何を実現したいのか—の答えを引き出していくことが求められています。以上は2008年3月に発行された同誌第14号に掲載された報告の一部であるが、本校のカウンセリングへの基本姿勢が端的に示されている。学校カウンセリングがすべての生徒を対象とし、生徒たちの精神的な自立を支援するものであるとすれば、私たち教師もまたそのような課題を担うものでなければならない。「発達段階における自己同一性の危機」は自立への契機でもあるという認識は、取り組みを通して教師たちが明確にしてきた問題意識であった。

スクールカウンセラーが配置されて30年以上の時が経った。本校のカウンセラーは中高一貫体制の取り組みの中で複数配置となり、常勤のカウンセラーを加えるなど勤務形態にも変遷があった。また、近年は、生徒を取り巻く社会環境の大きな変化の中でますます多様なケースへの対応が学校現場に求められるようになり、それゆえ病院、児童相談所その他関係する外部団体との連携もいっそう重要な課題となってきている。このように状況は変化したが、取り組みの中で培われたカウンセリングへの姿勢はこれからも大切にしていかなければならないと考える。

ところで、「思春期における人格の再統合」を「自分くずしと自分づくり」²と呼んだのは教育学者の竹内常一であるが、至言であると思う。中高生はまさに〈新しい自分づくり〉の渦中を生きる存在である。したがって、彼らの成長を祈り、支援することが本校における最も大切な教育課題であることは言を俟たない。そのような課題への取り組みの一つひとつが私たちの教育の改革の内側から支えてきたのであった。カウンセリングのみならず、教育のさまざまな領域で、それら思春期・青年期の生徒たちと向き合い、祈りつつ共に歩いた教師たちのこれまでの歩みを振り返り、大切に継承していくこともまた、これからの中高の教育を担う教師たちに求められているのである。

2 竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』(1987年、東京大学出版会)